

大原社会問題研究所 『日本マルクス主義文献』(未刊行)の意義

—戦前期大原社研の国際交流と内藤赳夫の文献目録への取り組み—

久保 誠二郎

はじめに

- 1 作成経緯
- 2 『日本マルクス主義文献』と他の文献目録との比較
 - (1) 社会主義関係全般の文献目録について
 - (2) マルクス・エンゲルスの著作、伝記などの文献目録について
- 3 『日本マルクス主義文献』の意義と内藤赳夫の業績

はじめに⁽¹⁾

本稿で扱う『日本マルクス主義文献』の原題は、“DIE JAPANISCHE LITERATUR UEBER MARX, ENGELS UND MARXISMUS VON 1919 BIS ENDE 1927” (1919年から1927年末までのマルクス／エンゲルス、マルクス主義に関する日本語文献)⁽²⁾であり、大原社会問題研究所の図書室主任内藤赳夫(1896-1944)が作成したものである。文献タイトルなどはローマ字表記とともにドイツ

(1) 本稿は、Berliner Verein zur Förderung der MEGA-Edition e.V. 主催のDavid-Rjazanov-Preis2004の受賞論文“Die Bedeutung der marxistischen Literatur in Japan für die Wirkungsgeschichte des Marxismus vor dem II. Weltkrieg — Eine komparative Untersuchung der Fachliteratur —”の日本語版である。本誌での掲載にあたって大幅に加筆した。

(2) 『日本マルクス主義文献』については、すでに拙稿「マルクス主義普及史研究における『日本マルクス主義文献』の位置」(『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第39号、マルクス・エンゲルス研究者の会、2002年10月、所収)で扱っており、本稿と内容上の重複があることをお断りしておきたい。また大村泉「高野岩三郎と『日本マルクス主義文献』」(同誌所収)は作成の経緯などを中心に詳述している。Rolf Hecker“Zu den Beziehungen zwischen dem Moskauer Marx-Engels-Institut und dem Ohara-Institut für Sozialforschung in Osaka.” in: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung Neue Folge Sonderband1*,1997,Argument-verlagにも若干の言及がある(S.98)。

なお『日本マルクス主義文献』は、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第39号において全文が掲載されている。

語に翻訳されている。

この文献目録は1929年に完成し、マルクス＝エンゲルス研究所・モスクワ(1921-1931)に送付され、同研究所機関誌『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』第3巻（ドイツ語版）で公表される予定であった。しかし、この企画は目録の完成まではこぎつけたものの—おそらくはソ連におけるスターリン体制構築の波及を受けて—同誌での公表は実現しなかった。その後、この文献目録はモスクワの研究所倉庫に保管されたまま、大原社会問題研究所の年史⁽³⁾にも正確な記録を留めることなく忘れ去られていった。この目録が、同研究所の後身となる現・社会＝民族問題ロシア独立研究所を訪問した大村泉によって再び「発見」されたのは、目録の完成から実に70年余を経た1999年であった。

管見の限り、この『日本マルクス主義文献』は、同時代に刊行された日本のマルクス主義文献の他の目録と比較して、そこに収録されたタイトルの豊富さと特徴的な分類とにおいて類を見ないのである。したがってこの目録は、戦前日本におけるマルクス主義の普及過程の一端を示す貴重な資料であろうと思われる。

そしてまた、この目録が現代に伝えるものは、戦前日本における社会科学研究所の先駆けであり、マルクス研究の一大拠点であった大原社会問題研究所と、当時のソ連を代表したマルクス研究者D. リャザーノフ(1870-1938)を所長とし、社会主義体制のもとで重要な位置を占めたマルクス＝エンゲルス研究所との交流の歴史でもある。

この目録の作成経緯からは、当時のマルクス研究における日露を代表する研究所の国際交流の一齣を見ることができよう。またこの目録が辿った不運な経過からは、当時の社会情勢に翻弄された人々の姿を読み取ることも可能かもしれない。

本稿では、未公表に終わったこの文献目録の作成経緯と、同時代に刊行された文献目録との比較を通して、歴史に埋もれたこの文献目録の意義の一端を明らかにしたい。

1 作成経緯

『日本マルクス主義文献』は、マルクス＝エンゲルス研究所（モスクワ）が刊行する機関誌『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』の第3巻（ドイツ語版）に掲載を予定されていた文献目録である。『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』には各国のマルクス主義文献の目録が掲載されており、『日本マルクス主義文献』はその企画の一環として大原社研の初代所長・高野岩三郎のもとで同研究所の図書室司書（後に主任）・内藤越夫によって取り組まれたものである。この取り組みは、国際的に知られた学術誌において日本のマルクス主義文献を世界に紹介しようとした最初の試みであった。

この先駆的な試みの経緯を、『法政大学大原社会問題研究所五十年史』、大原社研が保管する高野岩三郎の日記、ロシア国立社会＝政治史アルヒーフに保管されている高野・リャザーノフ（ツォー

(3) 『法政大学大原社会問題研究所五十年史』（1971年、法政大学出版局）、以下『五十年史』と略記する。Web版でも閲覧できる（ただし頁付けはない）。<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/50nenshi/index.html>

ベル）書簡などに基づいて紹介したい⁽⁴⁾。なお、高野・リャザーノフ書簡については本誌大村論文（16-35頁）を参照されたい。

内藤による目録作成の開始（1925年）

『日本マルクス主義文献』を作成した内藤赴夫が日本のマルクス主義文献の目録化に取り組み始めた契機について、『法政大学大原社会問題研究所五十年史』は次のように記述している。

1925年1月「高野氏は、図書係の内藤赴夫氏に、わが国における社会主義文献の目録作成と解説の仕事に着手してはどうかと話し、内藤氏はこれを承諾してその仕事にとりかかった」⁽⁵⁾。

「高野氏」とは、大原社会問題研究所の初代所長・高野岩三郎のことである。この記述によって1925年から日本のマルクス主義文献の目録化に内藤が取り組んだことが知られる。この内藤の仕事は大原社研の図書室司書としてのものであり、その成果のいくつかは大原社研から文献目録として刊行されている。内藤による文献目録関連の業績については後で若干触れたい。

高野、内藤の渡欧とリャザーノフとの面会、未完成の『日本マルクス主義文献』の寄贈（1927年6月～7月）

日本のマルクス主義文献の目録化に取り組んだ内藤は、1927年に高野の渡欧に同道することになる。その際に、それまでの目録化の成果を『日本マルクス主義文献』としてマルクス＝エンゲルス研究所（モスクワ）に寄贈することになった。彼らは1927年6月30日、ベルリンのソ連大使館で同研究所所長・リャザーノフと面会し、同年7月にはモスクワの同研究所を訪問することになる。

高野岩三郎の日記の1927年6月30日付には次のように記されている。

「日本マルクス主義文献独訳ハMarx-Engels-Archiv第三巻に載ルノ希望ニテ、右ノ著者ニ畧傳ヲ附ケタキ旨ノ希望ヲ述ベラル。ナルベク之ニ従フコトトシ原稿ハMoskauニテ同氏代理ノ仁ニ渡サレタシト請ワル。文献ハ向後引続キ作成ヲ依頼サル。承諾ス。」

この記述から、『日本マルクス主義文献』はマルクス＝エンゲルス研究所が刊行する『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』第三巻（ドイツ語版）に掲載する予定であることがわかる。

当時、このマルクス＝エンゲルス研究所が刊行する『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』の文献目録は、ロシア語版『アルヒーフ』⁽⁶⁾で公表されたのちに、1926年にドイツ語版『アルヒーフ』第1巻⁽⁷⁾でさらに補完の上、収録された。そこには各国のマルクス主義に関する文献目録が掲載されていた。リャザーノフから高野への目録作成の依頼も、その企画の一環として行われたのであった。

またこの面会において、著者の略伝を付すことや、さらに文献の採録を進めるようにリャザーノフから要望されていることからみて、この目録はまだ未完成であることも知られる。

(4) 高野日記、高野・リャザーノフ書簡は大村泉教授が蒐集した資料をご教示いただいた。高野・リャザーノフ書簡は翻訳して一部を引用する。

(5) 『五十年史』56頁。

(6) АРХИВ К. МАРКСА И Ф. ЕНГЕЛЬСА, Книга Вторая, Москва, 1925.

(7) *Marx-Engels-Archiv* I. Band, Verlagsgesellschaft M.B.H. Frankfurt A.M. 1926.

ベルリンでリャザーノフとの面会を終えた高野と内藤は、続いてモスクワのマルクス＝エンゲルス研究所を訪問する。『五十年史』は次のように記述している。

「高野氏はヨーロッパ渡航後、ミュンヘン、ベルリン等各地を歴遊、一九二七年七月一日には内藤氏と共にベルリンを発つて三日モスクワ着、マルクス・エンゲルス研究所を訪れ、所長代理ツォーベル氏の案内にて研究所を見学した。この折、内藤氏の作成した『日本マルクス主義文献』（独訳）を同研究所に寄贈した。」⁽⁸⁾

この記述から、高野らは1927年7月3日に『日本マルクス主義文献』をマルクス＝エンゲルス研究所に寄贈したことが知られる。ただし、『五十年史』は触れていないが、先述のようにこれはまだ未完成の『日本マルクス主義文献』であった。

高野日記には所長代理ツォーベルとの7月5日の面会について次のように記されている。

「先ヅMarx文献独訳を渡シ其ノAbschrift三部ノ今月末マデノMünchenへ送付ヲ頼ミ快諾ヲ得。此文献ノArchivニ現ハルノハ来年春ノ頃ナルベシ……

まるくす（マルクス…引用者）文献ニ筆者畧傳ヲ附スルコト、雑誌類ノ月刊、週刊本ノ記載ヲ求メラル。ナルベク應ズルコトトス。」

著者略伝を付すこと、月刊誌などの雑誌類にも範囲を拡げることなどが要望され、『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』への掲載は翌年1928年の春頃に予定されていることがこの記述からわかる。

こうして高野と内藤は、リャザーノフらとの面会を果たして『日本マルクス主義文献』を寄贈し、その『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』への掲載を約束されるとともに、目録自体の更なる拡充を求められて帰国したのだった。

『日本マルクス主義文献』作成の難航と完成（～1929年5月）

リャザーノフらから目録の拡充を求められた高野と内藤だが、その完成は難航することになった。ロシア国立社会＝政治史アルヒーフに保管されている高野書簡からその間の経緯を見てみよう。

高野は1928年6月25日にリャザーノフに次のように書き送った。

「…… 『日本マルクス主義文献』についていえば、次第に多数の補完や訂正が必要になっています。これには目下内藤君が関わっています。『文献』は出来る限り早く完成させ、貴殿にお送りする予定です。」⁽⁹⁾

しかし、目録の完成は更に遅れてしまい、『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』の文献目録の編集を担当していたツォーベルは催促の書簡を高野に送っている。1928年12月1日の書簡でツォーベルは、翌1929年の初頭には『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』第3巻（ドイツ語版）を刊行したいこと、その巻への掲載のために『日本マルクス主義文献』の早期の完成を高野に強く要請している。督促の書簡はさらに続き、翌年の1929年1月24日にもツォーベルから高野に送付された。

「私たちは『アルヒーフ』第3巻の準備に全力を上げている最中であり、私たちが補完を当て

(8) 『五十年史』62頁。

(9) この書簡はRolf Heckerの前掲論文に掲載されている（S.100ff.）。

にすることができるかどうかを早急に教えて頂く必要があります。私たちはこの補完に大きな意義を見だしています。というのは、内藤氏の『文献』が完了してから既に2年の歳月が経過しているからです。1929年に1926年で終わる『文献』を公表することが適切でないのは貴殿にも十分おわかり頂けるでしょう。私たちも良く存じておりますように、この場合、過去3年間に於いてはマルクス/エンゲルスの、また彼らに関する多数の労作が公表されている、という事情もまたたいへん重要です。」

この書簡でツォーベルは、目録の補完が無理な場合には、以前受け取った状態のまま『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』に掲載する用意がある旨を付け加えている。いよいよ切羽詰った状態になったのであった。

さて、高野はリャザーノフとツォーベルの強い督促に対して、目録の完成が遅滞していることへの説明と詫言状を送っている。1929年2月19日付でリャザーノフに、また2月23日付でツォーベルにその書簡を送った。ツォーベル宛書簡は次のようであった。

「…… 本年1月24日付のご書簡を拝見しました。ご質問には既に数日前リャザーノフ教授に宛ててご回答していることを取り急ぎお伝え申し上げます。この回答はおそらく貴殿のご不興を買うことになるでしょうが、ご理解頂きたいのは、私にはほかにする術がないことなのです。第1に、内藤君が病気だからであり、第2に、彼の尽力で問題の『日本マルクス主義文献』を可能な限り完璧に編集できるからであり、加えて第3に、そのドイツ語への翻訳は貴殿がおそらくお考えになっているほど簡単なものではないからです。……」

『日本マルクス主義文献』を完成させることは、その仕事に取り組んできた内藤にしかできないことであったが、当時その内藤は病身であった。リャザーノフ宛て書簡には、内藤が研究所の様々な他の仕事をこなさなければならないことも説明されている。こうしたことが遅滞の原因であった。

高野のこの弁明に対するリャザーノフからの返信は、「……ご病気が治れば、内藤氏は『日本マルクス主義文献』を仕上げた下さるだろうということ、またこの『文献』はまだ私たちのドイツ語版『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』で公表する可能性がある、という期待を抱かせてくれました。……」(1929年3月8日付)というものであった。

さて、リャザーノフらはまだ1929年春ごろの時点では、『日本マルクス主義文献』を『マルクス/エンゲルス・アルヒーフ』(ドイツ語版)に掲載するつもりであり、その早期の完成を強く望んでいたことに注意しておきたい。

内藤が病気から本復し、拡充・補完された『日本マルクス主義文献』が高野の校閲を経て完成したのは1929年5月初旬のことであった。

『日本マルクス主義文献』の「行方不明」と再「発見」(1929年5月～1930年5月)

ようやく完成した『日本マルクス主義文献』を、高野は1929年5月10日にリャザーノフに宛てて書簡とともに発送し⁽¹⁰⁾、リャザーノフはこれを5月28日に受領した。書簡と目録に同日の受領印を押していることが確認できる(表紙写真の左上に28.Mai 1929とある)。

しかし、ここで不可解な事態が生じる。リャザーノフは、あれほど強く督促してきた目録を受け取っておきながら、高野に何の返信も認めなかったのである。リャザーノフからの返信がないため、

高野は『日本マルクス主義文献』が到着したか否かを9月19日付の書簡で彼に問い合わせている。するとリャザーノフから「受け取っていない」との返信があった。

「……貴殿が既に5月10日に『日本マルクス主義文献』を私に宛てて発送されたという報せに全く驚いています。

私は貴殿の添え状も『文献』も受け取ってはおりません。従って私は、両者が郵便局で行方不明になったことを恐れるものです。……」（10月12日付）

高野日記によれば、この報せは1929年10月31日に高野のもとに届き、驚いた高野はすぐに郵便局に確認の手続きを取っている。しかし、この確認作業の結果を得るには翌1930年4月6日まで待たなければならなかった。

郵便局の調査では、1929年5月27日に郵送物は先方に届いている、とのことであった。このことを高野はリャザーノフに書簡で知らせ、リャザーノフは1930年5月8日にその返信を書いている。その返信には「目録が見つかった」と書かれていた。

「…… ありました！お送り頂いたものは実際迷子になっていました。貴殿から先般頂いた書簡を受けとった後で一生懸命探したところ見つかりました。……ともあれ、私は、おそらく、全点を『アルヒーフ』の次巻に掲載するでしょう。この巻は、全集を急いでいる関係で残念ながらいくぶん後回しにされていますが、今年中に出ることははっきりしています。……」⁽¹¹⁾

これまで見たように、1928年から1929年春まで、リャザーノフは目録の早期の完成を高野に強く要望していた。しかし、目録の「行方不明」事件をめぐるリャザーノフのいわば悠長な対応の仕方からは、そのような心配が希薄になっていることがうかがえる。リャザーノフの対応は、あたかも郵便局の調査結果が判明するまで放置して、調査結果が判明してからようやく研究所内を探し始めたかのようなものである。1929年初頭のツォーベル書簡に見られるような切迫した事態においては、このような対応はあり得ないだろう。

つまり目録の「行方不明」事件をめぐるこうした対応は、リャザーノフ側の状況が変化したことを示している。リャザーノフ自身が言明しているように、『アルヒーフ』の刊行自体が、この時点では「後回しにされ」るようになったからである。

この後、ドイツ語版『アルヒーフ』第3巻は刊行されることはなく、存続したロシア語版『アル

(10) 1929年5月10日付の高野日記による。ところで『五十年史』では、1929年度に「内藤氏の作成した『邦文マルクス・エンゲルス著作集目録』…省略（引用者）…をモスクワのマルクス・エンゲルス研究所に寄贈した」（71頁）との記述があるが、『日本マルクス主義文献』の送付に関する記述は漏れている。後で比較するように、この『著作集目録』は収録文献数が少なく、また日本語であるため、『日本マルクス主義文献』と同時期にマルクス＝エンゲルス研究所に送付する意味はほとんどなく（収録時期が1928年を一定含む点で1927年までの『日本マルクス主義文献』をわずかに補完する意味はあるが）、この記述には何らかの錯誤があると思われる。前掲大村論文37-38頁、参照。

(11) リャザーノフのこの言明どおり彼が『日本マルクス主義文献』を入手したのは高野の送付から約1年後だとする見解（前掲Rolf Hecker, S.98.）と、それに疑問を呈する見解（前掲大村論文51頁）がある。後者の疑問の根拠は『日本マルクス主義文献』に受領日付印を押している点にある。この見方は「行方不明」事件と後述するようなリャザーノフ側の変化との関連を示唆する。

ヒーフ』にも『日本マルクス主義文献』は掲載されることはなかった。

リャザーノフ自身は、目録が見つかったことを高野に知らせた前掲書簡から1年も経ない1931年2月15日にマルクス＝エンゲルス研究所の所長を解任される。

なぜドイツ語版『アルヒーフ』の刊行が後回しにされ、また、その後も『日本マルクス主義文献』が公表されることがなかったのだろうか。ここに、先駆的な試みとして内藤らが心血を注いで作成した『日本マルクス主義文献』の辿った不運な経過を見出せる。

未公表に終わった『日本マルクス主義文献』

先述のように、リャザーノフの『日本マルクス主義文献』への対応が変化したのは1929年3月頃から1929年10月頃の間であった。その間におけるソ連での政治状況の変化に着目して大村が推論しているのも、それに基づいて未公表に終わった理由に触れておきたい⁽¹²⁾。

1929年6月14日のソ連共産党中央委員会決定では、今後のマルクス＝エンゲルス研究所の活動について、ロシア語および原語でのマルクス／エンゲルス著作集の出版テンポを促進することが決定されたという。これは端的に、ドイツ語版『アルヒーフ』の刊行が後回しにされた理由であると考えられる。原語での著作集の刊行は、第1次MEGAが担うものであって、ドイツ語版『アルヒーフ』ではない。時期的にも、リャザーノフらが『日本マルクス主義文献』の完成を要請し続けた1929年3月頃までから、その気配が変わった1929年10月頃の間に行われた決定であり、リャザーノフの対応の変化を説明でき、説得的である。この決定はまた、学術的な活動を中心とするリャザーノフの研究所運営を変え、スターリンを中心とするソ連共産党中央の統制下に研究所をおくことを意図した決定でもあったという。

それと同時に挙げられるのは、1929年にコミンテルンで採択された「社会ファシズム」テーゼの存在である。社会民主主義者とファシストとを同列において排撃するこのテーゼは、スターリン体制の確立において威力を発揮した。このテーゼは、ソ連内部にもまた当時の日本の左翼勢力・知識人の間にも大きな影響を及ぼした。

これは『日本マルクス主義文献』の公表に関連して二つの影響を与えた。

一つは、対応が変化したとはいえ『日本マルクス主義文献』を『アルヒーフ』に掲載しようとした一方の中心的当事者であるリャザーノフの失脚（1931年2月）につながったことであった。社会民主主義勢力との内通を理由に彼は失脚したのであった。ドイツ語版『アルヒーフ』が後回しにされたとしても、リャザーノフが所長であれば何らかの公表の可能性が存在したかもしれないが、そうした望みは彼の失脚でついでた。

もう一つには、日本の左翼勢力・知識人の間に対立が持ち込まれたことである。『日本マルクス主義文献』には延べ750余の文献タイトルが収録されているが、このなかにはいわゆる社会民主主義者と目される人々の著作も入っている。しかも、1929年の河上肇のリャザーノフ宛書簡⁽¹³⁾では、「大原社会問題研究所の所員の殆どは、一、二の例外を除いて（例えば細川）、誰もが彼らは社会民主党を支持していると思える人物になってしまった」とリャザーノフに伝えられている。

(12) 詳細は前掲大村論文44-49頁を参照。

「社会ファシズム」テーゼのもとでのこうした状況は、もはや『日本マルクス主義文献』を『アルヒーフ』で公表することそのものを不可能とするものであった⁽¹⁴⁾。

こうして大原社研の先駆的な試みであった『日本マルクス主義文献』は、公表されないままモスクワの研究所の倉庫で保管され続けたのだった。

では、内藤赳夫が作成した文献目録とはいったいどんなものであったのか。次にそれを検討して、この文献目録の意義を見出してみたい。

2 『日本マルクス主義文献』と他の文献目録との比較

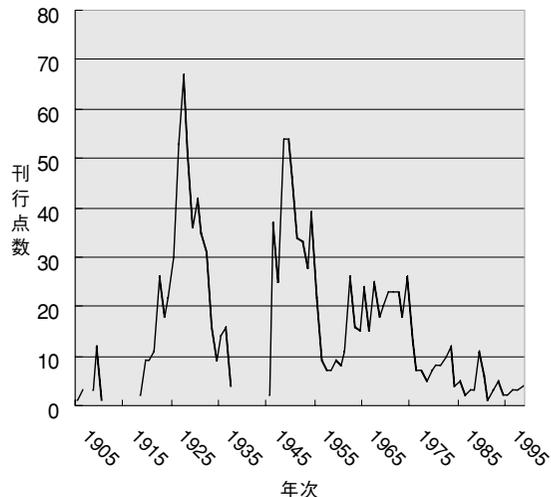
ここでは『日本マルクス主義文献』の特徴を、同時代に刊行された他の文献目録との比較を中心にして明らかにしたい。

第一隆盛期のマルクス主義文献を収録する『日本マルクス主義文献』

はじめに、『日本マルクス主義文献』が作成された時期は、日本のマルクス主義普及史においてどのような時期であったかについて簡単に触れておこう。1904年の堺利彦と幸徳秋水とによる『共産党宣言』の邦訳から始まるマルクス/エンゲルス著作の邦訳の歴史を、刊行点数に着目してグラフ化すると右のグラフのようになる。

このグラフから、日本におけるマルクス/エンゲルス著作の邦訳の歴史には3つの隆盛期があることがわかる。

マルクス/エンゲルス著作の邦訳点数グラフ⁽¹⁵⁾（1904年～1997年）



(13) 原文はロシア語、ドイツ語訳でRolf Heckerの前掲論文に掲載されている（S.105ff.）。

(14) 『五十年史』によれば「この年（1930年…引用者）高野所長は前述のように一月中旬以来、胆石病を再発し、四月の総会頃には一時回復したが、六月初旬再び発病、神戸・昭生病院に入院、その後三年余り、長い病床生活を余儀なくされた」（73頁）のであり、日本側で企画を進めてきた中心人物である高野にも『日本マルクス主義文献』の扱いをめぐる状況を進展させる条件にはなかった。

(15) このグラフは大村泉・宮川彰編著『新MEGA第Ⅱ部（『資本論』および準備労作）関連内外研究文献・マルクス/エンゲルス著作邦訳史集成』（八潮社、1999年）から年次毎の刊行点数を得てグラフにした。集計の仕方は、例えば3分冊での刊行であれば3点といったように、パンフレットや全集といった形態を問わず1冊について1点とした。ところで、このグラフとその当時の社会情勢との関連を見出すことは興味深いですが、ここでは割愛して別の機会に譲りたい。

第一期は1924年から1932年までであり、ピークは1927年の67点である。第二期は1946年から1955年、第三期は1962年から1974年である。

『日本マルクス主義文献』は1919年から1927年に刊行された文献を収録対象としており、したがって、第一隆盛期の前半部に刊行された文献のタイトルを収録する目録であると位置づけることができる。

同時期の文献目録との比較

戦前期日本における社会主義関連の文献目録の所在については、内藤の「社会主義文献目録の所在」(1~3)⁽¹⁶⁾、大塚金之助の「マルキシズム書目の書目」⁽¹⁷⁾の調査がある。それらを参考にして『日本マルクス主義文献』および同目録の作成時期や収録時期に近い他の文献目録を取り上げ、その収録点数などの書誌的なデータを一覧表にして以下で比較したい⁽¹⁸⁾。『日本マルクス主義文献』のデータは次の表1である。

表1 『日本マルクス主義文献』

書誌名	発行年	収録時期	収録点数	分類
『日本マルクス主義文献』 内藤赳夫著 大原社会問題研究所協力	1929年 作成	1919年から1927年	757点	14項目に配列

(1) 社会主義関係全般の文献目録について

表2 社会主義関係の全般的な文献目録

書誌名	発行年	収録時期	収録点数	分類
『日本社会主義文献 第一輯』 大原社会問題研究所編	1929年	1882年から1914年	401点	発行年次順の配列
『日本社会主義文献解説』『日本資本主義 発達史講座第4部』所収、細川嘉六著、岩波書店	1932年	1880年から1927年	180点 (小見出し)	3期に区分 して配列
『最近十年間における思想関係出版物総覧』 安田新栄、石倉俊雄編、刀江書院	1933年	1923年から1932年	3557点	5項目に配列

表2に掲げた目録は、収録対象が必ずしもマルクス主義文献に限られず、社会主義文献全般を扱っている。『日本社会主義文献 第一輯』は大原社研所員・森戸辰男のもとで内藤が作成した目録

(16) 『月刊 大原社会問題研究所雑誌』(大原社会問題研究所)第2巻第7号から第9号所収、1935年。『大原社会問題研究所雑誌』については、復刻版(日本経済評論社、2000・2001年)を用いた。なお、旧字体はすべて改めた。

(17) 『社会経済体系』第9巻所収、日本評論社、1927年。

(18) 表に掲げた文献目録は、そのほとんどを前掲内藤、大塚論文から選択した。一覧表では、作成時期や収録時期が明治期のもの、特定分野だけの文献目録、邦語文献以外を収録した文献目録、改造社版『マルクス・エンゲルス全集』別巻の著作年表等は除外した。大塚論文に記載がある『何を読むべきか』(社会問題研究会、1927年)は、確認することができなかったが、大塚によれば社会主義文献目録というより「社会科学書目に近い」(前掲「マルキシズム書目の書目」424頁)とされている。内藤論文に記載がある西雅雄訳『カール・マルクスの生涯・学説』(マックス・ベア著、白楊社、1931年)の付録「マルクス研究参考文献」については、筆者が複数の現物で確認したものには付録を見つけることができなかった。

である。この『日本社会主義文献 第一輯』は、収録時期が『日本マルクス主義文献』とは重ならず、また「第一輯」と銘打ってはいるものの続編が刊行されることはなかった。その点でいえば、内藤の大原社研での仕事として、そのいわば姉妹編にあたるのが『日本マルクス主義文献』であるといえるだろう。刊行年は『日本マルクス主義文献』の完成年と同じ1929年である。ちなみに表3にある「邦訳マルクス・エンゲルス文献」も内藤が作成した文献目録であるが、この目録の『大原社会問題研究所雑誌』への掲載も1929年であった。内藤は同じ時期に3つの文献目録を作成していたことになる。

さて、表2で文献の収録時期が重なるのは「日本社会主義文献解説」（細川嘉六）および『最近十年間における思想関係出版物総覧』である。

「日本社会主義文献解説」（細川嘉六）のユニークな点は、1880年から1927年までを三つに時期区分し、社会主義運動や情勢との関係で社会主義文献を解説していることである（『日本マルクス主義文献』には解題は付されていない）。この時期区分での第3期が『日本マルクス主義文献』の収録時期と重なる。そこで両者を比較すれば、「日本社会主義文献解説」の第3期に小見出しで掲げられた文献の数、および解説文中で言及される文献の数は計147点であり、『日本マルクス主義文献』は757点である。収録点数では『日本マルクス主義文献』が大きく凌駕している。もっとも、「日本社会主義文献解説」はタイトルどおり解題を中心にしたものであるから、両者の目録としての性格の違いではある⁽¹⁹⁾。

『最近十年間における思想関係出版物総覧』（安田新栄，石倉俊雄編）は、収録点数の多さでは圧倒的である。しかし、収録対象は単行本やリーフレットであり、雑誌論文は除外されている。そもそも社会主義文献に限定されず、国粋主義の文献まで区別無く、政治、法律、経済、社会、哲学の5分類に配列されており、解題は付されていない。そのため、この『総覧』から文献タイトルだけでマルクス主義関連の文献を抽出するのは困難である。これらの点で『総覧』は『日本マルクス主義文献』とは性格が著しく異なっている。この『総覧』は内務省関係者が作成した⁽²⁰⁾。

（2）マルクス・エンゲルスの著作・伝記などの文献目録について

表3 マルクス/エンゲルスの著作、伝記などの文献目録

書誌名	発行年	収録時期	収録点数	分類
「マルクスの著書」「エンゲルスの著書」他 『マルクスとエンゲルス』所収 嘉治隆一・ 後藤尋夫編，弘文堂書房	1925年	1905年から1925年	40点（邦訳文献）	5項目に配列
「社会問題文献解題 第1編マルクス主義文献」 『社会問題講座1-9』所収，新潮社	1926年	1905年から1926年	72点	4項目に配列
「邦訳マルクス・エンゲルス文献」（内藤赳夫編） 『大原社会問題研究所雑誌』第6巻第1号	1929年	1919年から1928年	249点	4項目に配列
「邦文 マルクス・エンゲルス著作集目録」 （大原社会問題研究所図書館編）	1928年	1928年まで	29点	2項目に配列

表3の文献目録は、社会主義全般ではなく、マルクス・エンゲルスの著作、伝記、学説に直接かわる邦語文献の目録である。ただし、表3の目録のほとんどがマルクス/エンゲルス著作の邦訳を収録対象としている。したがって、邦語の研究論文はあまり収録されていない。若干だが「社会

問題文献解題 第1編マルクス主義文献」に収録されている程度である。この点で多くの邦語の研究論文を収録する『日本マルクス主義文献』とは収録対象が異なっている。

ただし、『日本マルクス主義文献』は邦語の研究論文だけ収めたものではなく、多くのマルクス/エンゲルス著作の邦訳も収録している。そして、この点でもやはり『日本マルクス主義文献』は際だっている。表3の邦訳文献の収録点数において抜きん出ているのは、これもまた内藤の『邦訳マルクス・エンゲルス文献』であるから、それと『日本マルクス主義文献』との比較をしておこう。

『邦訳マルクス・エンゲルス文献』と『日本マルクス主義文献』

内藤が作成した『邦訳マルクス・エンゲルス文献』は『大原社会問題研究所雑誌』第6巻第1号(1929年)に掲載され、のちに独立の冊子(『大原社会問題研究所 アルヒーフNo.3 邦訳マルクス・エンゲルス文献』)として発行された⁽²¹⁾。前者の分類は著作、手紙、『資本論』および『剰余価値学説史』、全集等の4項目である。この目録の掲載は1929年であり、『日本マルクス主義文献』の完成時期と一致し、収録時期はそれより1年多い(1928年を含む)。『日本マルクス主義文献』での該当する項目(マルクス/エンゲルス著作の項目)に収録された文献数は172点であり、『邦訳マルクス・エンゲルス文献』は249点であるから、後者は77点ほど多い。これは主に1928年刊行の文献が

(19) 戦後、同書を継承して『日本社会主義文献解説—明治維新から太平洋戦争まで—』(大月書店、1958年)が刊行された。監修者の細川は同書の冒頭(同書1頁)で、戦前の『日本社会主義文献解説』は「大原社会問題研究所編『日本社会主義文献・第一輯』を土台にし」たこと、また内藤に言及して「当時のその仕事に、彼は非常に努力を傾注された」と述べている。つまり内藤は細川の「日本社会主義文献解説」にも間接的に関わっていることになる。

(20) この文献目録は左右の思想関係の邦語文献を幅広く収録したものである。編者による「序にかえて」では「内務事務官小林尋次氏並びに図書課調査係の諸氏」に謝辞が述べられ、付録には労組や左翼団体の動向などが解説されている。内藤はこの目録を「杜撰にして信頼するに足りない」と酷評している(前掲「社会主義文献目録の所在(1)」18-19頁)。

(21) 『アルヒーフNo.3』では「邦訳発表順による配列」が新たに加えられている。この点が雑誌掲載の目録との大きな違いである。収録された文献については、『アルヒーフNo.3』で「補遺」として加えられている『マルクス・エンゲルス全集第12巻』(改造社、1928年)所収の邦訳(18点)が、雑誌掲載の目録には欠けている。これらの点以外では、雑誌掲載の目録の誤植訂正などを除き、両者に違いはない。

『アルヒーフNo.3』の「はしがき」は、この目録の作成経緯に言及している。当時、『マルクス=エンゲルス全集』の刊行が企画され、その下準備としてこれまでのマルクス/エンゲルス文献の邦訳を調査したのが本目録作成の発端であるとされている。したがって『全集』企画の「副産物」とも記されている。また本目録の草案の段階では、「百余の専門家諸氏」にこれを送り意見を求めたとあり、当時のマルクス/エンゲルス文献の邦訳目録として完全を期すよう尽くしていたことが伺われる。

当然ながら『日本マルクス主義文献』に関する記述はないが、本文中で記すようにマルクス/エンゲルス著作の邦訳に限れば、『邦訳マルクス・エンゲルス文献』と『日本マルクス主義文献』のマルクス/エンゲルス文献の邦訳項目に収録された文献はほぼ重なっており、『邦訳マルクス・エンゲルス文献』作成におけるこうした取り組みは、『日本マルクス主義文献』にも生かされたということが出来る。

ちなみに『全集』の刊行をめぐるのは、5社聯盟版と改造社版との対立(本誌大村論文21-25頁参照)が生じたのだが、これについて「はしがき」は、その統一を希望したのだが果たせなかったことも記している。

加えられていることによる。その年次以外の両者に収録された文献タイトルを照合してみると、ほぼ重なっている。未公表に終わった『日本マルクス主義文献』だが、そのごく一部分はこうした形で公表されたともいえるだろう。

ちなみに表3の最後にある『邦文 マルクス・エンゲルス著作集目録』（大原社会問題研究所図書館編）は、作成経緯の項で述べたように、マルクス/エンゲルス研究所に送付したとの記述が『五十年史』にある目録である。他の目録と比較して収録点数が極めて少ないことがわかる。

さて、表2、表3の同時代の他の目録と比較した際、この『日本マルクス主義文献』のもつ特徴は、マルクス/エンゲルスの著作の邦訳とともに、日本のマルクス主義の研究論文を網羅的に収録している点にある。また、それらを14項目にわたって分類した点も特徴的であろう。文献目録として肝要な点は、まずはその収録文献の豊富さにあり、またその分類にあるといえるだろう。管見の限り、こうした点で『日本マルクス主義文献』は抜きん出ている文献目録であり、同時代に類のない文献目録であるといえるだろう。

3 『日本マルクス主義文献』の意義と内藤赳夫の業績

収録文献の源泉と『日本マルクス主義文献目録』の構成

『日本マルクス主義文献』は他の目録にない豊富な文献タイトルを収録しているが、その文献タイトルの収集において、時期的にみて直接に役立ったのは大原社研が刊行する年次ごとの『日本労働年鑑』であったと推測される。それに付される文献目録を内藤は担当しており、これを基幹部分として収録点数の豊富な『日本マルクス主義文献』が完成したのだと考えられる。

『日本マルクス主義文献』のもう一つの特徴である14の分類項目は次のようである。

表4 『日本マルクス主義文献』の分類（項目は翻訳）

	分類項目	収録点数		分類項目	収録点数
1	・書誌	7	6	・マルクス主義全般	60
2	・マルクスの書誌関連諸論考	33	7	・マルクス主義と哲学	195
3	・マルクスの伝記と学説	15	8	・マルクスの経済学説	171
4	・マルクスおよびエンゲルスの遺稿	6	9	・マルクス主義の国家論	45
5	・現実政治の個別問題に関するマルクスとエンゲルス		10	・カール・マルクスの著作	
	- 農業問題	7		- 全集	5
	- 女性問題	1		- 資本論	22
	- 労働組合	2		- 個別論文	82
	- 戦争	1	11	・エンゲルスの著作	42
	- 芸術	4	12	・マルクスおよびエンゲルスの書簡	16
	- 政治	7	13	・マルクス/エンゲルス研究所について	2
	- 社会政策	1	14	・本書誌所収主要雑誌一覧	31
	- 中国とロシア	2			

『日本マルクス主義文献』作成の意義

この構成は、マルクス＝エンゲルス研究所の『マルクス／エンゲルス・アルヒーフ』に掲載された文献目録の構成に準拠している。

ロシア語版『アルヒーフ』には、各国のマルクス主義文献が収録された文献目録が掲載されており、それはさらに拡充され、1926年のドイツ語版『アルヒーフ』第1巻に掲載された。このドイツ語版の文献目録は、ロシアを除く各国のマルクス主義文献を1914年から1925年までの範囲で収録したものである。先述したように『日本マルクス主義文献』はドイツ語版『アルヒーフ』第3巻での公表を企図して作成されており、したがって内藤が作成した『日本マルクス主義文献』は、『アルヒーフ』の文献目録の構成に準拠したのだった。両者は細部は異なるがほぼ同一の構成である。

こうした構成は他の文献目録にはない『日本マルクス主義文献』の特徴であろう。

『日本マルクス主義文献』作成の意義

ここで『日本マルクス主義文献』の意義に触れておきたい。『アルヒーフ』掲載の文献目録について内藤は「現在、最大の国際的マルクス主義文献目録は、何と言っても、Marx-Engels-Archiv.Bd. I. 所載のDie Literatur über Marx, Engels und über Marxismus seit Beginn des Weltkrieges」であると述べており、大塚金之助も「今日吾々のもつ最も重大なもの」と評している⁽²²⁾。『アルヒーフ』掲載の文献目録は、当時においてきわめて評価の高いマルクス主義文献目録であった。

したがって、それへの掲載を企図した『日本マルクス主義文献』作成の意義を考察すれば次のようであろう。

第一には、すでに作成経緯の項でも述べたが、当時の日本のマルクス主義文献を、国際的な学術誌である『アルヒーフ』の文献目録の構成に準拠して目録化し、また『アルヒーフ』への掲載を介して日本のマルクス主義研究を世界に紹介しようとした先駆的な試みであった。

第二に、前項での他の文献目録との比較からわかることは、当時の状況に即して日本のマルクス学の発展を志向したものであったということである。前掲の出版点数グラフからわかるように、当時の日本ではマルクス主義文献の刊行が隆盛期を迎えていた。しかし、それら氾濫する邦語文献を目録化し、学術利用に供することは遅れていたものと考えられる。内藤論文「社会主義文献目録の所在」には欧州の文献目録とともに日本のマルクス主義文献目録が多数紹介されているが、前項での検討から明らかなように、内藤が紹介している当時の日本の文献目録には『日本マルクス主義文献』に匹敵するほどの豊富な収録数と細かな分類を備えているものはなかった。こうした学術状況における『日本マルクス主義文献』の作成は、まさに向後の学問的な発展を支えるための必須の課題であったといえるだろう。

『日本マルクス主義文献』と内藤赳夫の業績

内藤赳夫について二村一夫は「内藤赳夫は…省略（引用者）…日本の書誌学の歴史において注目すべき業績をあげた」⁽²³⁾と述べている。図書室主任である内藤の大原社研での待遇は研究員と同じであったという。専門職として遇された内藤は、待遇に違わない業績をあげたのだった。それは

(22) 前掲内藤「社会主義文献目録の所在（3）」59頁。前掲大塚，426頁。

(23) 二村一夫「労働関係研究所の歴史・現状・課題」（『大原社会問題研究所雑誌』第400・401合併号所収，1992年4月）4頁。Web版『二村一夫著作集』<http://oisr.org/nk/>から検索。

表2, 3に記した内藤による文献目録（『日本社会主義文献 第一輯』、『邦訳マルクス・エンゲルス文献』）に現れている。また内藤の書誌学的な研究の深さは、彼の前掲論文での無政府主義や社会主義、ボリシェビズムに渡る極めて広範で綿密な文献目録調査、また社会統計学院主催の社会問題講演会での講演という形にも現れている⁽²⁴⁾。

そして本稿で検討してきたように、この『日本マルクス主義文献』はこの分野での内藤の業績をさらに際立たせるものであろう。仮に『日本マルクス主義文献』が『アルヒーフ』で公表されていれば、おそらくそれが内藤の業績の中心をなしたに違いない。

さて、『アルヒーフ』で『日本マルクス主義文献』を公表しようとした企画のソ連側の当事者であったリャザーノフは、1931年2月15日にマルクス＝エンゲルス研究所所長を解任された後、1938年1月21日に銃殺刑に処された。日本側の当事者である内藤は『アルヒーフ』への掲載の望みが消えたのち、『アルヒーフ』の文献目録についてわずかな言及を残している。内藤は1935年に掲載された前掲論文のなかで、先述のようにドイツ語版『アルヒーフ』の文献目録に高い評価を与えたいうえで、それに注釈を付して次のように難点を指摘した。

「国際性は数カ国にわたっているが…省略（引用者）…「マルクス主義文献の洪水」を叫ばれた邦文々献の収録に至っては五指に過ぎぬ有様である」⁽²⁵⁾。

まさにこの邦語文献の欠落を埋めるものこそ、自身が多大な労力と熱意とをもって取り組んだ『日本マルクス主義文献』に他ならなかった。しかし、当時の社会状況ではそれに言及することは憚られたのであろう。内藤は自身の『日本マルクス主義文献』には触れずに邦語文献の欠落のみを—おそらくは無念さとともに—指摘したのだった。

こうして大原社研と内藤の先駆的な取り組みであった『日本マルクス主義文献』は、その当時において日の目を見ることなく歴史に埋もれていった。

しかし、現代においてこの文献目録は、日本のマルクス主義普及史研究に貴重な資料を提供し、また戦前期に交わされた大原社研とマルクス＝エンゲルス研究所との国際交流の史実を私たちに伝えている。

〔付記〕 本稿の作成に関して、大村泉教授（東北大学）からは『日本マルクス主義文献』のコピーならびに高野・リャザーノフ書簡などの貴重な資料を提供していただいた。早川征一郎教授（法政大学）からは入手困難な『アルヒーフNo. 3』などの資料を提供していただいた。大和田寛教授（仙台大学）からは戦前期の文献資料をご教示いただいた。記して謝意を表する。

（くぼ・せいじろう 東北大学大学院科研費研究員・経済原論専攻）

24) 『五十年史』によれば1935年11月15日に「文献より見たる本邦社会思想の推移」という演題で内藤が講師をしている（92頁）。また内藤には片山潜研究がある（前掲『月刊大原社会問題研究所雑誌』第3巻第3号、同4号、1936年）が、当時の片山評価に対して「原資料に基づき」検討すべきことを掲げ「資料のあるものを提供せんとする文献的な一考察」（第3号2頁）として論を進めているのは、社会主義文献の目録化に取り組んできた内藤の面目躍如たるものがある。

25) 前掲「社会主義文献目録の所在（3）」60頁。